

昭和三十年に手記した山越の覚え書きを抜き書きする  
と下記の様ふことが書かれています。

昭和三十年一月十四日午前九時頃——今日は東京(地方)農地  
事務局を訪ねるより定む。朝の風は東北と定む。込み合  
み電車にもまれおから水道橋で降りて、いつとも通好道を  
歩いてナウカ書店の前を通るとき、一寸店をのぞいたが、また早  
いで大竹先生(廣吉)はあ見之におらあかつた。

車高は(農地事務局)南らかれて居たので次見漁課を訪ね  
た。顔見知りの小林さんが、見之て居たので南拓用地計画  
の認可の様子をたがねた。

小林「許下にあつたはつてす。確かに三好君は出雲一途者へ  
行って干支叫は来ません

三好君というのは、この地区(浅草中一地区)担当者として居た技師  
である。

確かに認可にあつて居るは、お目にかいらあつてよいです。



別に他に要件はありませんから「まあよかった、本者によかった。私は全く安心した。六月中旬にも一旦この水戸開拓地問題である。」

「これはこれで失礼致します、三好さんらしくお待た下さい」  
「おかしニまうまい。おかしニと比ぶる人には御迷惑をあげがけして清井もあんなに。あつたにあら開拓地の比日さんにおまゝ」  
「資源課を請去する時に官房長の在否を聞いて出た」  
官房長室を訪ねると各課からの報告、打合せ、差回等が三十分程待たされた。

私加しひれをきくらせて居るのを見た、官房長は  
「もう少しお待ち下さい、午があまいますから」といふので又席についで新聞を披りけて見て居ると「おかし」  
「山越さん」と呼ばれて、振りおき、次資源課の小林さんであった。彼は書類を手に持って入って来て書類を見つけて来ました。確か判決さされて居ます。残る



才一地。二月七日。局長代決。小林さんは指先で書表の上を順次指先で追ひながら、確かに局長の代決のサインが印さされて居た。今日農地事務局と訪ねた主要の目的は終り早く開拓地の諸君に報告して陰気な空気を押さえて、希望を輝やく躍進をさせたい。

「どうもお待たせしました。官房長が牛がすいたので一礼して席に着いた。」

「今日は中間として開拓地計画が認め承にあらうたのを嬉しく思ひます。いろいろ心配慮あうかという存じました。」

「いやいや、よかったですね。」

「官房長さん、昨年一寸お話し致しました。馬令重君の夏時分の「普通」時分は、春時分が常道。決果が大体見あがつかない。たので、土地計画の決裁の其後の様子を知つたり、其後継次手に夏時分馬令重君の成績の申報お出しした。と思ひましてお邪魔致しました。お進み感いでおいでしよるか。」



「いや／＼をこれでどうしましたか」 官房長は牛早く机の上から  
ノートを取って、私の話を待期して居る。

「昨年夜（昭和二十九年）種子としてつかった馬令菓は、男が富貴で  
既に百々蒔を二斗くうがへしたものを用ゐました。（昭和二十七年と  
二十八年）です。から第三斗目の夏蒔にあります。

蒔付けは六月十八日にしました。

大体の成育期間中の気象は七月一極は低温多雨で八月初  
旬から天候が回復して気温が上り~~早~~<sup>お</sup>う早魃とあり、九月中旬  
まで高温が続き、最高温度は三十六度四分が二日もありました。

蒔取りは十月下旬一土月中旬 株立ち、平均百々で、前二斗の何  
れより多収されたのです。前の二斗は三〇分一四五分程に記憶し  
て居ります。又小粒の蒔芋歩合も極めど少量でした。

官房長は熱心なメモを取って居る、強度の近眼鏡の下から  
人あつこい目でこちらを見ている。

「この実験の目的は」



種子馬令藁が、掘取う水からササ付け近での日時が長い程種子  
としての価値が順次低下するということ

オニには、岡山産の二化性芋の成績が良いいこと

オニには、婦兼材の春蒔き馬令藁の七八月のベト病防除の~~時~~蒔毒時

期が自らの除草の時期とから合つて除草が速いと雑草に他の

作物が圧倒され収穫を激減する。手かまわらぬと来々雑草の

種子を蒔き撒す結果とある。自らの草との闘ひは一般に農芸木の且収

り教養戒を要する内題であるだけに消毒作業と競合しおの様に

馬令藁が成功すれば良くはあつか。これには入植者の難みの

一つです。開拓民は稼働力は、~~表~~婦を主体として中には親を

扶養するか、お見を求めている。これ等は生立はにプラスするのであ

く、水がとすればマイナスとあるものである。一方未能土地は沢山残

つていて、これと開拓民をあければ、生活は拡張出来ぬ。

やっと開拓土地の計画が今日外周がきまってきたばかりで入植以来は

新田定めに拡張したばかりの土地を分配して作付にして居るだけ



てありあすから、**純粹**と**農**（<sup>心</sup>）たけで一本立ちする形態には遠く  
 及ばあいで、**営農資金**（政府貸付）や**開墾補助**（<sup>金</sup>）よりあけ水は  
 生命すら維持出来ません。こんなこと~~で~~で泣きとを言ひあせんか。  
 開墾<sup>地</sup>というものは若い者がやることで、やがて妻とめと子供が生れるの  
 は当然で耕地が<sup>増</sup>はせば稼働力はそれにかゝりし耕地と増す方  
 へは手<sup>が</sup>廻<sup>り</sup>と兼るといふのが当然と思ひます。

婿妻<sup>の</sup>は、種子馬令者よとは主要作物ですが、稼働力や資材の関  
 係など大変困難な問題があつて種子馬令者を作るときは嫌  
 はれ始めている様に思ひます。エ水等の傾向を防止するに  
 其の対策として一試案として研究する価値があると思ひます。  
 四つには、第三年度の実績の及ぶ三百五十五程度<sup>の</sup>収穫申す  
 から高田佃値のあるもの三百メとして單佃七の月とみれば及ぶ二万  
 千円位の収入にありますが、外にようよいものがあるのは採算は  
 とります。

「夏時馬令者の次代の成績はどうですか」



「その水は岡山や化性の成績が良いのと同じ証明さ水で居りますように  
に、高冷地産や、北海道産に優る成績が得られたいです。

私も夏蔭の次代を種子にして二度程実験した春の芽ましたか優  
つた成績をあげました。」

こんなことを話していら、ノックの音がして室内へ入った来る靴  
の音が近づいて来た。振り返って見ると、東海林群馬叔農  
地部長であった。赫然の偉丈夫だが近眼鏡の下には童顔か  
にシクして居る。温厚な役人である。

此の農地部長には時々、入植地々域の決定を急遽に決定するよう  
迫ったことが、あるので人柄をよく知って居たし、親身な心配を  
してくれて居たが、複雑な土地関係にあつたため、互々の希望を  
清うあてに叶うことが、つた。

官房長と初打面の挨拶をしていたため、両者が始のこの会見と  
思つた。一應の会談が終つたため

「部長さん、長い間、心配願ひました。土地問題も此方認



承にありました。やつとやめの新しみました。  
部長「そりやアよかつた。出しかつた取、比日さんには市道(米)成心(を)か  
けました。」

部長が辞去すると、官房長は、

山根さん大竹先生の交へ行きましたよう、此交に居ると切りのあり  
まさんから」といふので曲底地事務局を出ることにした。